EurekaXII

六年制通信　№22　令和６年10月11日（金）号

収穫を問うなかれ

これは19世紀の中国、ということは清ですが、その軍人の言葉とされています。でもどうかなぁ。というのは、軍人にとっては収穫、つまり成果だけが問題なのであって、そこに至る作戦とか努力とか、そういうのは勝った後の反省の材料にするだけで、とにかく勝たなければ意味がないわけですから、そんな軍人の言葉とはちょっと思えませんね。ボクサーなど戦う人たちも絶対にこんなことは言わないでしょう。負けたら、結果が出なければ、つまり収穫がなければおしまいですからね。ただ、こういう言葉は古今東西たくさん残されていますから、人生の真実の一面は確かに表しているのだと思います。収穫を問うなかれ、これには「ただ耕耘を問え」と続きます。耕耘は「こううん」と読み、田畑を耕すことです。耕耘機は今では耕運機とも書くようですが、皆さんも見たことがあるでしょう。

収穫を問題にするのではなく、問うべきはそこに至る努力である、いかに田畑に時間をかけ耕してきたか、そこだけを問うべきであるということですが、もう少し考えてみましょう。私は「そこだけを問うべきである」を「そこだけしか問うことはできない」と言いたいと思います。なぜか。毎日田畑を耕す、毎日何かに努力をする、もちろん求めたい成果があってそれに向かって努力をするわけですが、成果が手に入るかどうかを決めることは私たちにはできないからです。田畑で何かを育てているとして、たとえどんなに時間をかけて世話をしたとしても立派な果実ができないこともあるわけです。成果がどうなるかは私たちの能力を越えた問題のように思います。

一方、「終わりよければ全てよし」、「勝てば官軍」のように、最後がうまくいけばそれまでの過程はどうでもよい、むしろ全てが正当化されるといった考え方もあります。君たちの受験で考えても、とにかく合格さえしてしまえばそれまでの勉強のやり方、かけた時間、そういった合格に至る過程はすべて正しいということになりそうです。しかし、自分が精いっぱいの努力をしたか、それは自分が一番よく知っているわけです。適当な努力で勝ち得たとしたら、その果実は食べてみれば案外美味しくないのではないでしょうか。私たちは結果を求めることは出来ても実際に行うのは「求めて努力すること」だけです。そこだけを問う、そこだけしか問えない、そのことを忘れずに求めるべきものを見つけたいですね。

また、成果を求めて計画を立てても、その通り実行できないことがあります。不断の努力というのは、言うのは簡単ですが実行は難しいものです。それでも計画を立てることが大切です。計画と実行の関係は次の４通りになりますね。

1．計画を立てた　→　実行できた　　○　→　○
2．計画を立てた　→　できなかった　　○　→　×
3．計画なし　　→　できた　　×　→　○
4．計画なし　　→　できなかった（しなかった）×　→　×

1番は問題なし。気持ちのいい結果ですから。4番も別に驚くにはあたりません。当たり前の結果というか関係ですからね。さて、この中でもっとも反省しなければいけないのは何番だと思いますか。「ただ、耕耘を問え」に照らすと2番ですね。計画の実行、即ち努力ができなくなったのには何らかの原因があるはずです。計画を立てるとは、耕す畑の大きさを決めることでもあると思います。このくらいの畑ならこれだけ時間で耕すことができる、そう考えることが計画を立てるということです。それができなかったということは、計画に無理があったのかもしれないし自分がさぼったからかもしれません。反省し、計画の立て直しをしなくてはいけませんし、できますよね。

面白いというかちょっと危険なのは3番です。これは例えば、計画的に勉強していたわけではないのに成績が伸びたとか志望校に合格したといったケースです。これは手に入れた果実は、本当に君の求めた果実なのかをもう一度問う必要があります。若いうちはうんと手を伸ばさないと手に入らない果実を求めるべきだと私は思っているので、簡単に手に入る果実で満足してほしくはないのです。

今週のおすすめ

・井上ねこ　『赤ずきんの殺人』　（宝島社文庫）

サブタイトルは「刑事・黒宮薫の捜査ファイル」。他に同じ文庫から『花井おばあさんが解決！ワケあり荘の事件簿』もあります。デビュー作は「このミス大賞」の優秀賞を受賞した『盤上に死を描く』です。この人、詰め将棋作家なのです。

この本はタイトルから想像できると思いますが、グリム童話の「赤ずきん」、「白雪姫」、「青髭」、「ヘンゼルとグレーテル」をモチーフに連続殺人が起こり、黒宮と部下の犬走が真相に迫るというもの。まずまず普通のミステリーです。黒宮と犬走のコンビを、この一作だけで判断はできませんが、もう少し二人の人物像が浮き上がってくるといい連作ができるのではないかと思います。

ちなみに、もうグリム童話を読んでいて「白雪姫」なんて有名どころは当然知っていると思っている人がいるかもしれません。しかし、実はグリムだけではないのですが、外国の童話も日本の昔話も、君たちの知っているお話は原作とはかなり違っている場合があります。こんなの、勝手に変えていいのかねぇ。つまり、原作はかなり残酷なのですね。「三匹のこぶた」とか「かちかち山」ですら、ひょっとしたら君たちは、ゆるーく書き直されたものを読んでいるのかもしれませんよ。興味のある人は原作を探して読んでみるのがいいでしょうが、相当ショックを受けるかもしれませんから気をつけて下さい。なお、グリム兄弟は童話を創作したのではなく、言語研究のついでに昔話を収集したのですね。ですから、昔話集と言った方が適切でしょう。

BGMは　ユーミン の *海を見ていた午後*　でした…。